



文苑

門松の説

布士の舎

明日の爲として松竹にしりくめなは取りそろへて、ゆづり葉、齒菜など、家毎に葺き侍る、御門公卿の家はさらなり、とは、彼のえせ文としられたる、四季物語の言葉なり。我また世にならびて、立つや立たずや知れねども、明日のまけに、今宵の程、おのか門に門松の説一つたてんものと、一間にたてこまれるは、我ながらいとくをこがましうこそ。

寒けしや 除夜のならひとて 大路にひきもて
 きえぬけいしの音を、木枯の風の誘ひ来て、窓の
 を戸をかすむる聲の、やがて埋火かいおこしつゝ、
 燈などかさたて、こゝらの文の林にたちいれば、
 枯木のみいとおほくて、わくれどく、さらにとるべき材のあるべうもあらず、やみなむか、さりとは心おち居ず、落葉拾はんか、さりとは皆朽ちたり、梢をおろさんか、梢なきをいかにせん、根こしとらんか、根なきを如何にせん、終に一夜をこめて、たましくにときはの色あるをみるとりては、掘しかきはの榮あるもおこしては、やうくくに考へ得たるもの、かゝるさまなりければ、猶ひがむともすくなからざるめり。いでや年の初、門に松たてそめしは、今より八百五十餘年の昔なり、竹をたつるは、また三百四十年ばかりく

だりて、應永の頃よりや始まりけらし、されどそのころは、猶賤が家居のかど毎に立てられけるにて、都におしうつりぬる事は、いつの代よりか定かならず、鹽尻に案はあれど、いかにぞやおぼゆる、己はかの光明峰寺入道の攝政たりし時によめりける、初春の花の都に松をうゑて、民の戸とめる千代ぞしらるゝといふ歌をもて、物にみえたる始とはせん。さるにても、昔松柏を以て、賤が家に、疫鬼をさけん爲に門戸にたて、或ははさみかかれたる時こそ所謂門松あるは立松にはありけれ、かの鄭玄のいへる華紀麗のしるせる昆布果實等の物を挿み、あるは齒朶ゆづり葉等を用ゐて飾られたる兼冬の頃となりては、かのづからこゝに言葉の沿革をなして、松飾とは云ひをめしならざるか、徳川の代の久保田侯の人飾 佐賀侯の鼓の

胴飾 平戸侯の松の代に椎の板飾の定例ながら畢竟世下りて飾といふ事のあかしともならんかし。されとこれらは、一時のおこり、一家のならはしにて、もとより時と共に亡ひ、家と共に衰ふるは、いふまでもなければと、おのれは橙海老、なとしてかざられたるをは、門松といふとも、ひたすらに、松あるは松と竹とを以て、たてたるを松飾とはいはすもがなと思ふぞよ。そはとまれかくまれ、今日の松のたてさまは、おしなべて二百四十余年前、寛文二年、及び十年の二度に、七日に松竹を取拂ふべき町觸いて、久しく十四五日の頃までたておかれつるならはしに、強てさかのぼられしよりこのかた かはらぬのゝの如し。また今の縁門めく物は、皇朝にもふるくよりありつることゝおぼゆ、こは所によりては中々による

しきものなから、このころおしなべたるならはし
ならぬはいかなる故やらん。さてまたたつる日
は、今こそさま／＼なれ、のぼりての世にいと首
かたむくれば、顯季ぬしの歌に、門松をいとなみ
たつるそのほどに 春あけかたによやなりぬらん
さりけり／＼、今宵ぞやとつぶやく耳に、け近く
八聲の鳥なきて、年はあけがたになりけり。あ
はれやかみん／＼、さるにても此かたまつ、初日
の影まちて、とさはの色に匂はんや 匂はじやあ
づつかなうこそ。

故郷と都

(故郷に母と女の友あり
都にわれと男の朋あり)

鷺

水

故郷

年の始にうちよりて

へだてぬ君と今こゝに

語るも聞くも武藏野の

都

其の一もとの外ぞなき

四十八

其の一もとの外ぞなき
其儘なるは都より

故郷

こそ玉ひし言の葉の
わが故里を思ふなり

雁の玉章と絶えしと
八重の汐路を距つとも

都

恨むはおろか母子中
距てぬ心は君ぞ知る

距てぬ心は君ぞ知る
空行く月の隅田川

故郷

よしや海山遠くとも
上野の花を音つれん

わかれし今日の身と知ら
葦つみし夢なれや

都

樂しき野邊に打ひれて
歌留多取りし夢なれや

歌留多取りし夢なれや

今は旅旅のうき思ひ